資料1

AI時代の世界を先導する新たな教育システムを確立し、教育・人材育成大国を実現する

2026年11月24日

東京大学公共政策大学院教授
慶應義塾大学特任教授

鈴木寛

2040年以降の社会をどのように捉えるべきか？実現すべき社会像・人間像、教育が果たすべき使命・役割など

○ AI Agentやロボットが随所に存在・稼働し、人間と共生する社会。重要な価値判断、倫理規範づくりは引き続き人間が担う。
○ 地球環境問題、分断、格差がより深刻さを増す。資本主義、民主主義、市場、政府、国際機関等の近代統治システムによる問題解決の限界・機能不全がより深刻化。叡知による構想力・行動力、熟議により促される自発的で協働的な共創行為がより求められる。
○ 人間・社会・地球・自然・科学技術・文化の関係を、生産性・効率性だけからではなく、Beyond GDP（＝卒近代）、地球・社会・人間の持続可能なウェルビーイング（Sustainable Wellbeing）、人間の尊厳などの視点から組み直す必要に迫られる。

○ 西田幾多郎（1870-1945）は、人間とは、世界から切り離された存在ではなく、世界や他者との関係の中で純粋経験によって自己を見いだし、身体を通じた行為によって世界をつくり変えながら、自分自身も形成していく存在である。世界に作られながら世界を作り返し、有限性を自覚しつつ、固有の人格を実現していくことに、人間の本質がある。と考えた。

○ 福澤諭吉（1835-1901）は、人に欠くべからざる性質として、身体、智恵、情欲、至誠、意思をあげ、この性質を自由自在に取り扱うことをもって一身の独立をなすと考えた。「読書は学問の術なり。学問は事をなすの術なり。実地に接して事に慣るるに非ざれば決して勇力を生ず可からず。」とも述べ、実地での実践を重視した。

○ 人間の価値を、人工物生産のための能力や生産性だけで測らない、社会が重視すべき価値を、ともに熟議し、ともに決め、共創できる人間
○ 自分と他者・世界との関係を理解し、その関係をよりよくしていこうとする人間 （Relational Agency）
○ 共生と共創（多文化、人間と技術、人間と自然）の作法・態度を実践から学ぶ
○ コミュニティや公共を支え・担うこと、他者や世界に貢献することを、レスペクトし、憧れ、志ざす教育

○ AIをしっかり検証しながら使いこなすとともに、人間にしかできないことをしっかり担える人材
　・人間の五感＋内受容感覚のうち、聴覚と視覚と触覚からの情報の一部が記号化・言語化・記述可能であり、その限りにおいてAIが学習可能。生成AIごとに公共哲学的価値判断は異なる。
　・記号を現実世界に接地させること、言語化できない感覚・感性、AIを監視・検証する能力、事の軽重を判断するための常識を学ぶ。
　・「常識は、身体をもつこと、技能を通じて、世界と相互作用すること、文化を学ぶことによって獲得（鈴木貴之） 」
○ リアルワールドを知る・感じる・創る教育を。AIやロボットとの適切な共生を経験・模索・探究する学びを

AI時代の世界を先導する新たな教育システムを確立し、教育・人材育成大国を実現

～2040年以降の社会変化の捉え方、社会・教育の目指すべき方向性～

社会変化の捉え方

世界の潮流

・国際秩序の多極化、紛争の多発化
・デジタル社会の進展と AI の浸透
・気候変動問題の激化
・価値観のパラダイムシフト（SDGs、SWGs，Beyond GDP、卒近代 ）

日本の課題と社会像

・子ども若者たちの低いウェルビーイング
・急激な人口減少・超高齢化と地方の衰退
・経済成長の停滞と経済的な国際プレゼンスの後退
・大規模な労働力不足と人材需給のミスマッチ、学ばない大人
・社会の多様化と生活格差・分断、地域コミュニティの希薄化

目指すべき方向性：教育の役割と打ち手

○ 生徒・教師・保護者・コミュニティ・社会・地球のウェルビーイング向上に資する学びを
○ 自ら問いを立て、判断・決断し、責任を引き受ける、能動的主体となるための学びを
○ すべての児童・生徒・学生・市民に、画一・均等ではなく、
それぞれに最善な学びの実現に向けた 公正な支援を

☆人間ならではの力を育み、一人一人の可能性を解き放つ

～ 教育・学習環境のリ・デザイン ～

○ 工業社会型標準一斉画一均等教育からの脱却
・受験で脅して苦手克服の苦行を強いる勉強（大人になって学ばなくなる原因）、
同質性の高い競争が生む勝者と敗者の分断、文字優位特性偏重から脱却
←入試倍率の低下

○ 内発的動機づけによる学びを
（学習への関与、好奇心、自律学習、Edutainment）

○ AI時代における、学校・教師の役割の再定義

・純粋経験、場所、歴史的身体、行為的直観、絶対矛盾的自己同一（西田幾多郎）
・勇力を得る実地（福澤諭吉）、 Whole Person, Whole Point (T.Arnold)
・講義のレクチャラー
→ 体験、創造、活動、対話、熟議、感化、共感、共創、
チュートリアルのファシリテーター兼オーガナイザー

○ 安全かつ主体的なAI活用環境整備（デジタル教科書・教材の普及含む）

・「ガードレール付き」のAI、
Intelligent Tutoring System等の安全な実装・利活用の促進
・認知特性と発達特性に応じて個別最適化し協働学習を支える
マルチモーダルな学習環境（デジタル教科書・動画・音声も活用促進）

○アンバンドルし、ベスト・ハイブリッドを可能にする学校システムの柔構造化
・場（サイバー/校舎/フィールド）
×誰と（同じ学級の生徒・他校生徒・異学年生徒/教員・学習支援者・AIエージェント）
×いつ（授業/放課後/在宅）
×何を（形式知（指導要領・教科書・副教材）/現場知）を個別最適化した
協働的学びを小中高大で再構築、それを可能にする制度の柔軟化

○小中
・探究的学びの導入・普及
・情報・技術科教育を通じた、新たな産業構造・就業構造に向けた
キャリア・ライフデザイン教育
・中学における学習のベスト・ハイブリッド化の加速（中３生の約１割が不登校傾向）

○高校
・高校入試改革（選抜から選考へ）
・探究的学びの更なる浸透（教科含む）
・教科・活動等に応じた履修主義・習得主義のより実質的な組み合わせ
・高校における数学、理科履修率の向上（特に女子生徒）
・高校での多様な学び、越境・複線的な学び促進のための制度再編
（ダブル・デイグリー、ジョイント・ディグリー、単位の包括認定、
全日・定時・通信制の制度再編等）

○保護者の意識変革、理解促進、支援的関わり、産業界による協力
・昭和の成功モデルの思い込みからの意識変革
・保護者と児童・生徒との関係性の改善
（家族にサポートしてくれると思っている15歳の比率世界最低、
家族による支援的な関わりの頻度が低位）
・産業界の協力による保護者の働き方を重点的改善し、子どもと共に過ごす時間を確保
（定時退社、在宅勤務、きめ細かな有給消化促進）

目指すべき方向性：教育の役割と打ち手

☆教育の力で日本経済を牽引する ～人材力・総合知によるリ・イノベート ～

○ サイエンスやアートの力で我が国を元気に

○ 成長戦略17分野を牽引し、地域を支える人材の育成

○ 高大通じて、文理の双方の素養を有する人材、理系人材の育成
（15歳の半分弱が数理で高成績であるにもかかわらず、高校生の半分が普通科文系、大学生の半分以上が人文・社会科学系で、その多くが理数の学びから離れている現状を抜本的に改善）

○ 高校・高専でのアドバンスト・エッセンシャルワーカーの育成

○ 大学に行きたくても行けない人々（地方、女子、家計、障害、育児、仕事）への支援
・特に地方の女子の大学進学を総合的に支援（成人女性の学び直しを含む）

○ 給付型奨学金拡充
・給付額増額、所得制限緩和による受給者拡大、社会人向け枠創設など

○ 入学定員等
・各地域の産業、インフラ、医療介護を支える人材需要や産業・社会構造の変化を踏まえた人材育成策を知事中心に協議、地域の高校・高専・大学等を再編（７・５・３）
・理系又は文理融合学部、高専の新設・増員、専門高校から高専への編入枠の増
・専門高校にも大学進学コースを
・伝統的大規模大学の理工・デジタル・AI社会系等成長分野への学部転換促進

○ 入試（選抜から選考へ）
・文系学部入学者選考に数学・情報の観点を導入（内申書評価でも可）
・受験技術でなく専門高校での実践的学びを選考で評価
・高校までの越境（国内外の留学）を大学の入学者選考で評価
・CBT/IRT、パフォーマンス評価（探究、特活、部活）による選考

○ カリキュラム（板挟みと想定外と修羅場と向き合う学び）
・AX実装人財育成のためのMDA（Mathematics, Data Science, AI）教育の実施・充実（文系学部学生にも）
・大学でも、越境体験を奨励・応援
・実習・実技・実験・PBL等実践教育プログラムを増
・これらを実現するためのST比の改善

○大学の18歳中心主義からの転換
・大学・大学院の社会人枠（over25枠）導入・増員
・社会人向けの学費負担軽減策を構築
・社会教育・生涯学習と高等教育の連携・融合・協働

☆教育を通じて、持続可能な地域社会を形成する ～地域のリ・ビルド～

○ 課題の共通性に応じ、地域が離れた教育委員会間の“緩やかな広域連携”
・複数自治体での教育長・指導主事・政策人材等のシェアを可能に（クロスアポイントメント）

○ 地域の高校教育の拠点は極力存続し、ネットワーク化、協働化
・複数拠点でオンライン学習プラットフォーム、教材、教育用AI、教員、人材等を共有・共創
・地域の学びの拠点存続のため高校設置基準を見直し（単に生徒数だけで存廃を判断しない、ネットワーク・コンソーシアム型向けの基準を創設）

○「越境」の促進
・都会の高校生の地域留学を支援
・都会の高校と地方の高校の交流・連携・提携を促進
・高校の「ダブル・ディグリー、ジョイント・ディグリー」、単位の包括認定を促進

○ 地域創生に向けた社会教育政策とコミュニティ政策の連動

☆社会全体で教育を担い、未来を切り拓く教育システムへの転換 ～教育システムのリ・バランス～

〇コミュニティ・スクールを核としたスクール・コミュニティの実現（保健室、給食施設、家庭科教室、図書室、工作室、美術教室・音楽教室、体育館、ホール、農地・・を地域住民に）

〇高校のおけるコミュニティ・スクールの増加、コミュニティスク―ス化された中・高間で相互協力

☆改革のための社会資源の確保（人・資金・場所・機会・・・）

〇「人への投資の好循環」の実現、省庁・官民の垣根を超えた総合戦略の構築と実施

〇「学び国債」の創設

〇高校・大学が行う実践教育・PBLへの実業界からの支援促進

〇民間人・公務員の教育ボランティア休暇創設、教育副業解禁・促進

〇「放課後の学び支援」「奨学金」等、教育・学び支援に対する寄付、民間資金の信託・寄託・導入・活用を促進（例 放課後共創基金）

参考資料

西田幾多郎（鈴木寛文責）

- 人間とは、主客未分の「純粋経験」に根差し、すべてを含む「絶対無の場所」において自己を見出す存在である。そして、単なる肉体を超えた「歴史的身体」として、「行為的直観」を通じて世界に働きかけ、「世界に形作られながら世界をつくる人間」として、歴史を創造し続ける「絶対矛盾的自己同一」の体現者である。

- 西田幾多郎にとって、人間は世界から切り離された独立の自我ではなく、経験や他者、歴史的な世界との関わりの中で成り立つ存在である。個人がまず孤立して存在し、その後に世界と関係するのではない。むしろ「経験あって個人ある」というように、自己は世界との具体的な経験を通して形づくられる。その根底には、主観と客観が分かれる以前の「純粋経験」や、自己と世界の対立を包みながら両者を成立させる「絶対無の場所」がある。
- 人間は、歴史や社会の中で形づくられた身体をもち、その身体を通じて世界に働きかける。西田のいう「行為的直観」とは、世界を外から眺めて理解するだけでなく、対象に働きかけ、何かをつくることを通して世界を知るあり方である。人間は世界によって形づくられながら、行為によって世界をつくり変える。そして、その働きは同時に自己自身を形づくる。人間は、世界の中で身体をもって行為し、世界と自己をともにつくり続ける存在なのである。
- また、自己を実現することは、自分だけの利益や思いに閉じこもることではない。知・情・意の根底にある深い要求を生き方に表し、その人固有の個性を十分に発揮しながら、他者や世界に開かれていくことが「人格の実現」につながる。互いに異なる人々が、それぞれの固有性を保ちながら関わることも、人間のあり方の重要な一面である。西田は、そうした自己の本性や個人性の実現に善を見いだした。
- しかし人間は、世界を自由に支配できる存在ではない。死や有限性、自分の意志を越える現実に直面することで、人は自己が独立した絶対的な中心ではないことを知る。そうした限界への自覚は、自己を否定するだけでなく、他者や世界との関係の中で自己の根底を見つめ直す契機にもなる。

西田幾多郎先生（1870－1945）

『人間的存在』

- 「歴史的現実の世界は制作の世界、創造の世界である。制作というのは我々が物を作ることであるが、物は我々によって作られたものでありながら、何処までも自立的なものとして逆に我々を動かす……」出典：西田幾多郎「人間的存在」、『西田幾多郎全集』第9巻、9頁。岩波文庫版『西田幾多郎哲学論集Ⅲ』では339頁

『善の研究』

「人間の本性」について

- 「理想の如く実現するというのは物が自然の本性を発揮する謂である。それで花が花の本性を現じたる時最も美なるが如く、人間が人間の本性を現じた時は美の頂上に達するのである。善は即ち美である。」出典：西田幾多郎『善の研究』第三編「善」第九章「善（活動説）」

人それぞれの固有性について

- 「個人において絶対の満足を与える者は自己の個人性の実現である。即ち他人に模倣のできない自家の特色を実行の上に発揮するのである。」出典：西田幾多郎『善の研究』第三編第十二章「善行為の目的」

吉田松陰先生（1830-1859）

松陰神社名誉宮司上田俊成著「熱誠の人吉田松陰語録に学ぶ　人間力を高める生き方」致知出版2022より

- 斉しからざる人を一斉ならしめんとせず、所謂才なる者を育することを務むべし。
- 人、賢愚ありと雖も、各々一二の才能なきはなし、湊合（そうごう）して大成する時は必ず全備する所あらん
- 立志、択交、読書
- 学問は須らく己が真骨頭を求得し、然る後、工夫を著くべし
- 凡民と豪傑の分を明らかに知るべし。豪傑とは万事自ら草創して、敢へて人の轍跡を践まぬことなり
- 知は行の本たり。行は知の実たり。二つの者固より相倚りて離れず、誠は知行の自ら誠なるなり。誠を思ふは知行の誠ならんことを思ふなり。
- 聖賢の貴ぶところは、議論にあらずして、事業にあり。

福沢諭吉先生（1835-1901）

・ 学問のススメ 「人に欠くべからざる性質」 福澤諭吉

「その論の大意にいわく、人の一身は他人と相離れて一人前の全体をなし、みずからその身を取り扱い、みずからその心を用い、みずから一人を支配して、務むべき仕事を務むるはずのものなり。

ゆえに、

第一、人にはおのおの身体あり。身体はもって外物に接し、その物を取りてわが求むるところを達すべし。

第二、人にはおのおの智恵あり。智恵はもって物の道理を発明し、事を成すの目途を誤ることなし。

第三、人にはおのおの情欲あり。情欲はもって心身の働きを起こし、この情欲を満足して一身の幸福をなすべし。

第四、人にはおのおの至誠の本心あり。誠の心はもって情欲を制し、その方向を正しくして止まるところを定むべし。

第五、人にはおのおの意思あり。意思はもって事をなすの志を立つべし。

以上、五つのものは人に欠くべからざる性質にして、この性質を自由自在に取り扱い、もって一身の独立をなすものなり。」 福澤諭吉『学問のすゝめ』第八編より」

- 「読書は学問の術なり。学問は事をなすの術なり。実地に接して事に慣るるに非ざれば決して勇力を生ず可からず。」（福澤諭吉） 学問のススメ第五編

•トマス・アーノルド（1795_1842）

- トマス・アーノルド（1795_1842）は、「The Whole Person, The Whole Point」 と主張し、知性だけでなく、人格・道徳性・心身の健康・人間関係・創造性なども含めた、その人全体を教育すべきで、教育は、学んだことを生き方や社会への関わりに結びつけるものだ。「第一に道徳的原則、第二に品位ある振る舞い、第三に学問的能力」との考えを示した。

鈴木貴之著「人工知能の哲学入門」勁草書房2024より

- 原初的な記号が意味をもつためには、記号が記号でないものと結びつけられなければならない。この結びつきは、知覚や行為を通じて可能になる。（鈴木貴之p50）
- ある状況において重要でない知識を端的に無視しなければならない。どうすればこれが可能になるのか。これが人工知能研究におけるフレーム問題と呼ばれる問題である。（鈴木貴之p53-p54）
- 常識は、身体をもつこと、技能を通じて、世界と相互作用すること、文化を学ぶことによって獲得される。（鈴木p62）
- 様々な要因が作品の美しさにどのような仕方で影響を与えるのかを、一群の規則で表現することはそもそも不可能であるように思われる。このようなあり方は、コード化不可能性と呼ばれる。哲学においては、美、善、合理性といった性質はコード化不可能であり、大きさや重さといた物理的性質とは根本的に異なる性格をもつとしばしば論じられてきた。（鈴木貴之p60）
- 文章化されたデータがほとんど存在しない事柄に関しては、大規模言語モデルは適切な言語処理ができない。（鈴木貴之p172）

コロナ患者受入れの優先順位

- あなたは病院長です。新型コロナで患者さんが市民病院に殺到しています。市内に集中治療室をもった病院は一つしかありません。そのなかには、集中治療が必要な患者さんも多数います。しかし、病院の集中治療室ならびに治療に必要な機器に数が限りがあります。あなたは、だれから優先的に入院させるか、AからIまでの優先順位をつけてください？
- なお、医療従事者はまず優先されるとします。すべて、真に治療が必要と思われる患者だとします。
-

A治療を受ければ治る見込みが高いと思われる患者
B治癒後すみやかに社会機能を維持する職に復帰する患者
C治療が成功すれば余命（年齢と有病の有無）が長いと予想される患者
D扶養・ケアの必要度（子供・障害・難病・要介護）が高い家族・身寄りを抱えている患者
E重症度の高い患者
Fこれまで市の発展に貢献してきた患者
Gこれから市の発展に貢献してくれそうな患者
H先着順
I抽選（国民IDの下二桁とか、三桁とかで決める）

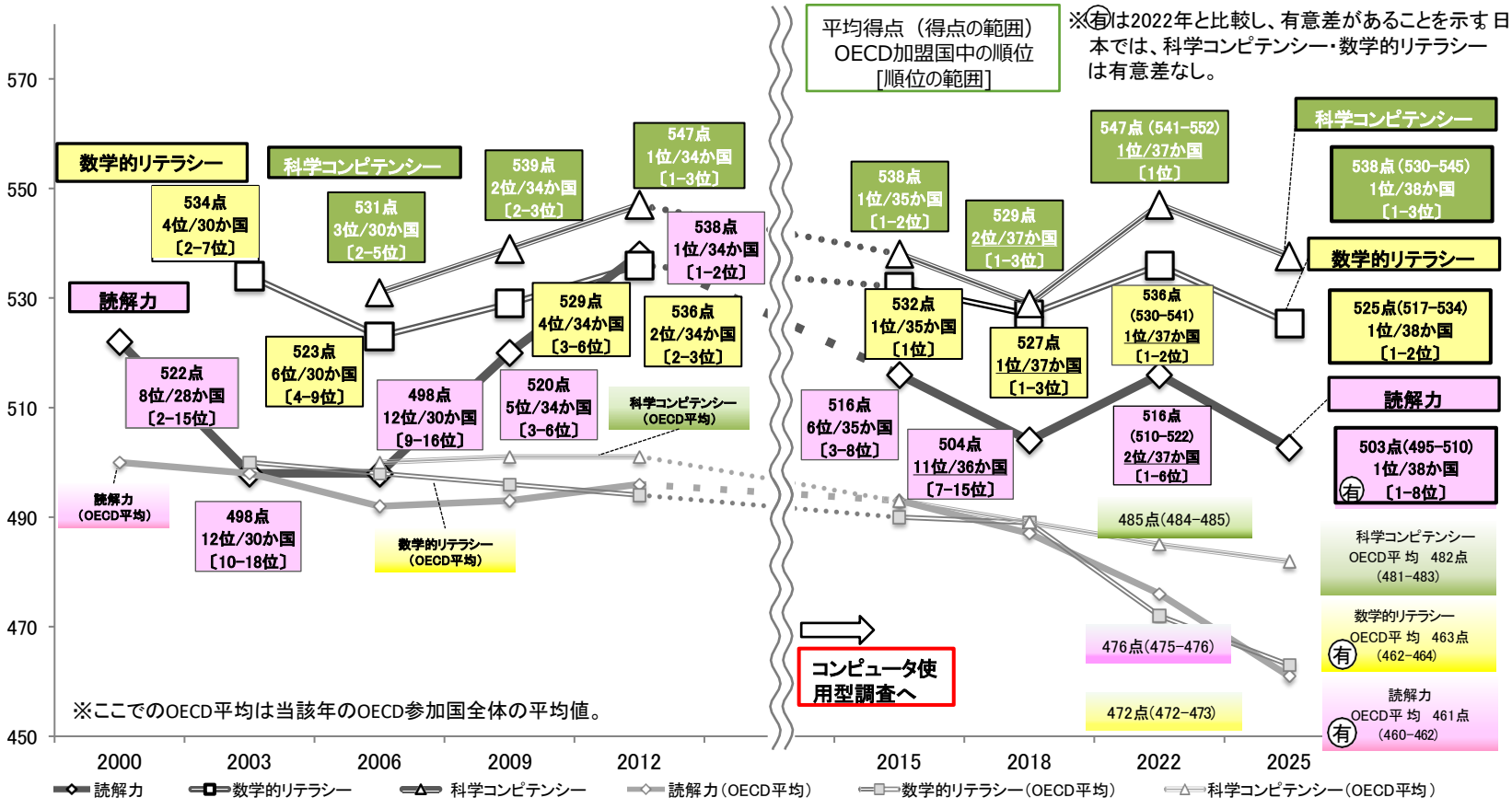
主な生成AIの回答は、生成AIごとに違い、しかも、同じ生成AIでも時期によって異なる→重要な公共哲学的価値判断は人間が行う必要がある

- 2024年7月
  - Bing　　AEBDFGCHI
  - Chat GPT　EABDCFGHI
  - Bard　　ABCDEF
- 2025年7月
  - CoPilot　　ACBDEGFHI
  - Chat GPT　ACBDEGFHI
  - Gemini　　ACDB
- 2026年7月
  - CoPilot　　AECDBHIGF
  - Chat GPT　AECDBHIGF
  - Gemini　　ACBEDIHGF
  - Claude　　EACDBGFHI

PISA2025の結果（概要）

PISA平均得点及び順位の推移

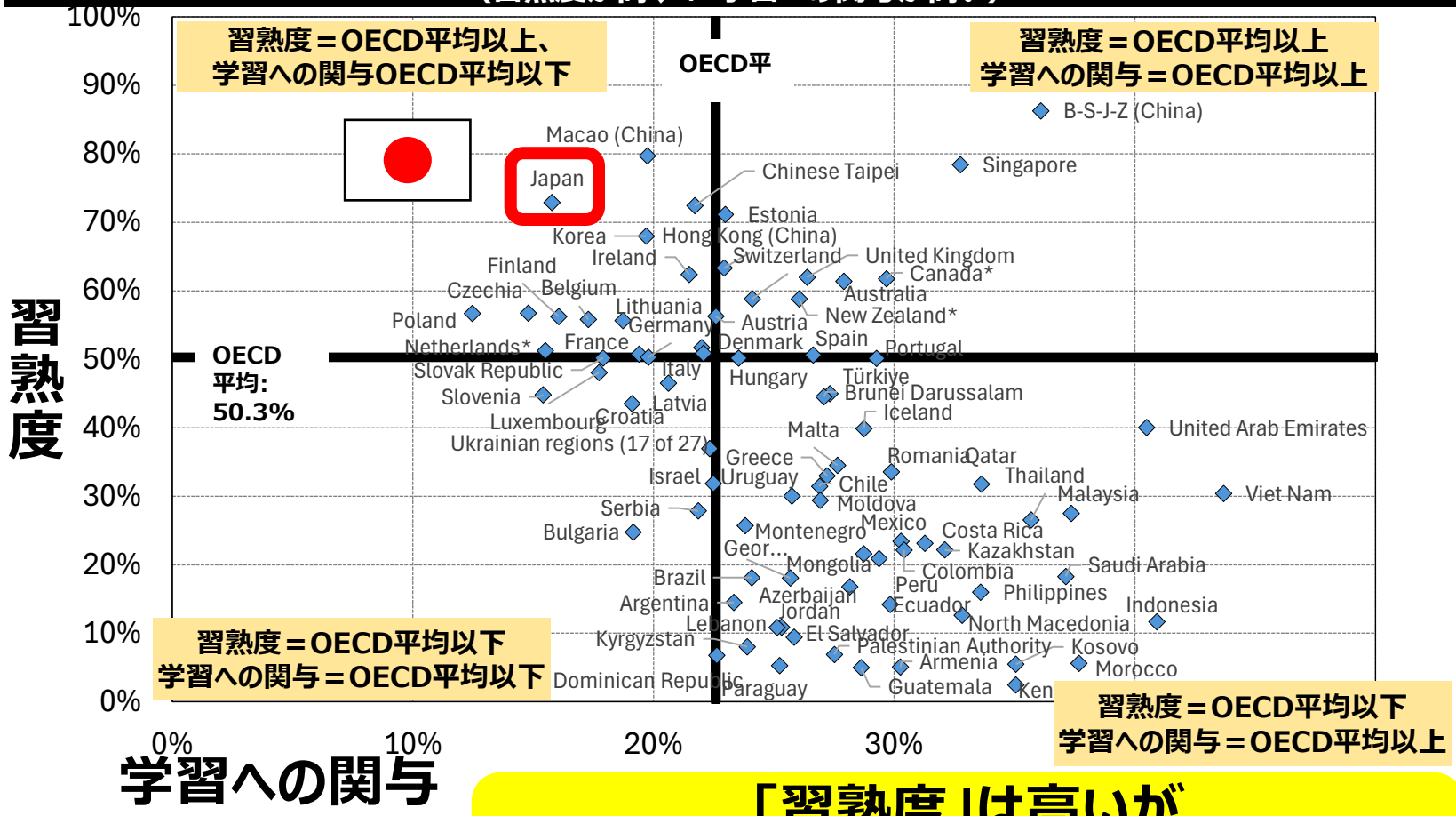
2015年以降、OECD平均は平均得点が低下しているが、日本は横ばい（平均得点のトレンドに有意な変化がない）。



PISA2025

Competent learnersの割合

（習熟度が高く ＋ 学習への関与が高い）



・縦軸は、「Proficient learners」（科学コンピテンシー・読解力・数学的リテラシーの３分野全てで一定の水準（レベル２以上）に達し、さらにラーニング・イン・デジタルワールド（コンピュテーショナルな問題解決能力）でもレベル３以上に達している生徒）の割合。

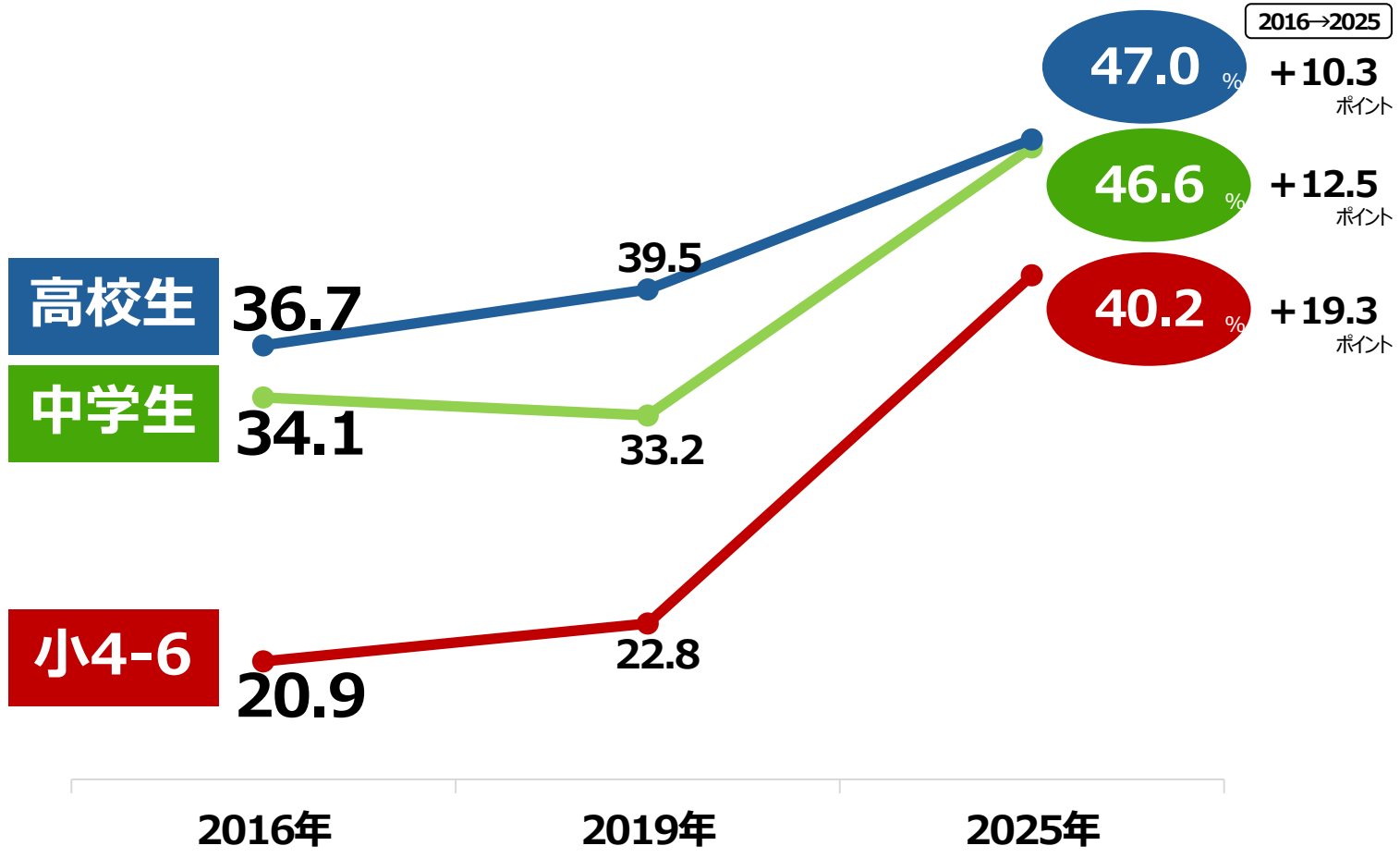
・横軸は、「Engaged learners」（好奇心、目標設定、忍耐力、助けを求めることに関する右の質問調査４問全てに肯定的回答をした生徒）の割合。

＊国名の後に「＊」が付されている国・地域は、PISAサンプリング基準を１つ以上満たしていないことを示す。

「習熟度」は高いが
「学習への関与」が低い日本

（好奇心、つまづいたら助けを求める、難しい課題に努力する、学習の自己調整）

「何のために勉強しているのかわからない」小中高で４割超

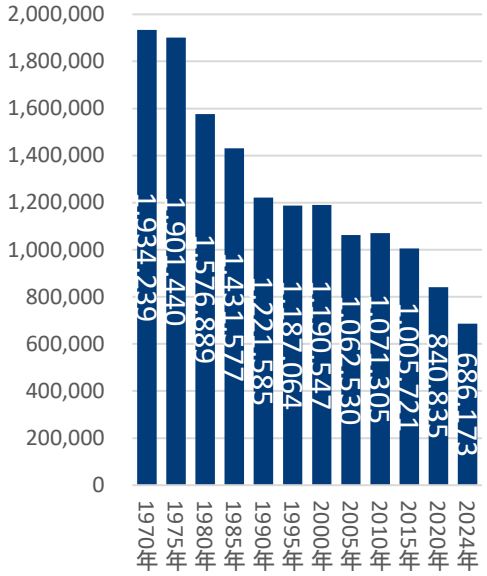


（出典)東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2016-2025」
＊「あなた自身のことについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか」という設問。**「何のために勉強しているのかわからない」**に対して、「とてもあてはまる」「まああてはまる」という回答の合計（%）。

大学全入時代が到来
公立高入試も倍率低下（県トップ校でも倍率１倍）

出生数

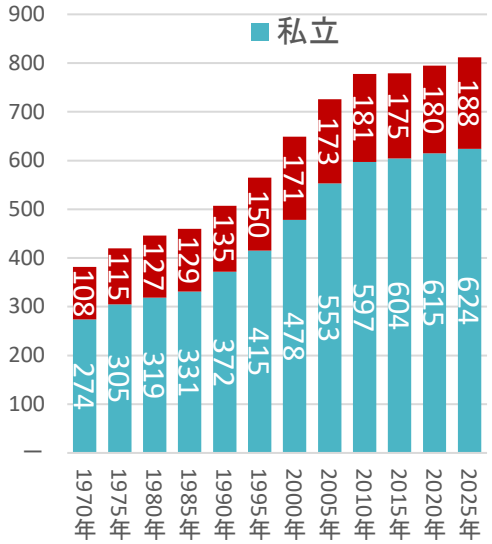
約50年で4割以下



出典）厚労省「人口動態調査」

大学数

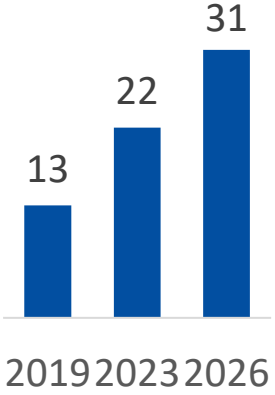
約50年で2倍以上



出典）文科省「学校基本調査」

高校入試（公立）

倍率1未満の県3分の2



北海道 青森 岩手 宮城 秋田 山形 福島 茨城 群馬 富山
山梨 長野 岐阜 愛知 滋賀 京都 兵庫 奈良 和歌山 鳥取 島根
岡山 広島 山口 愛媛 高知 長崎 熊本 宮崎 鹿児島 沖縄

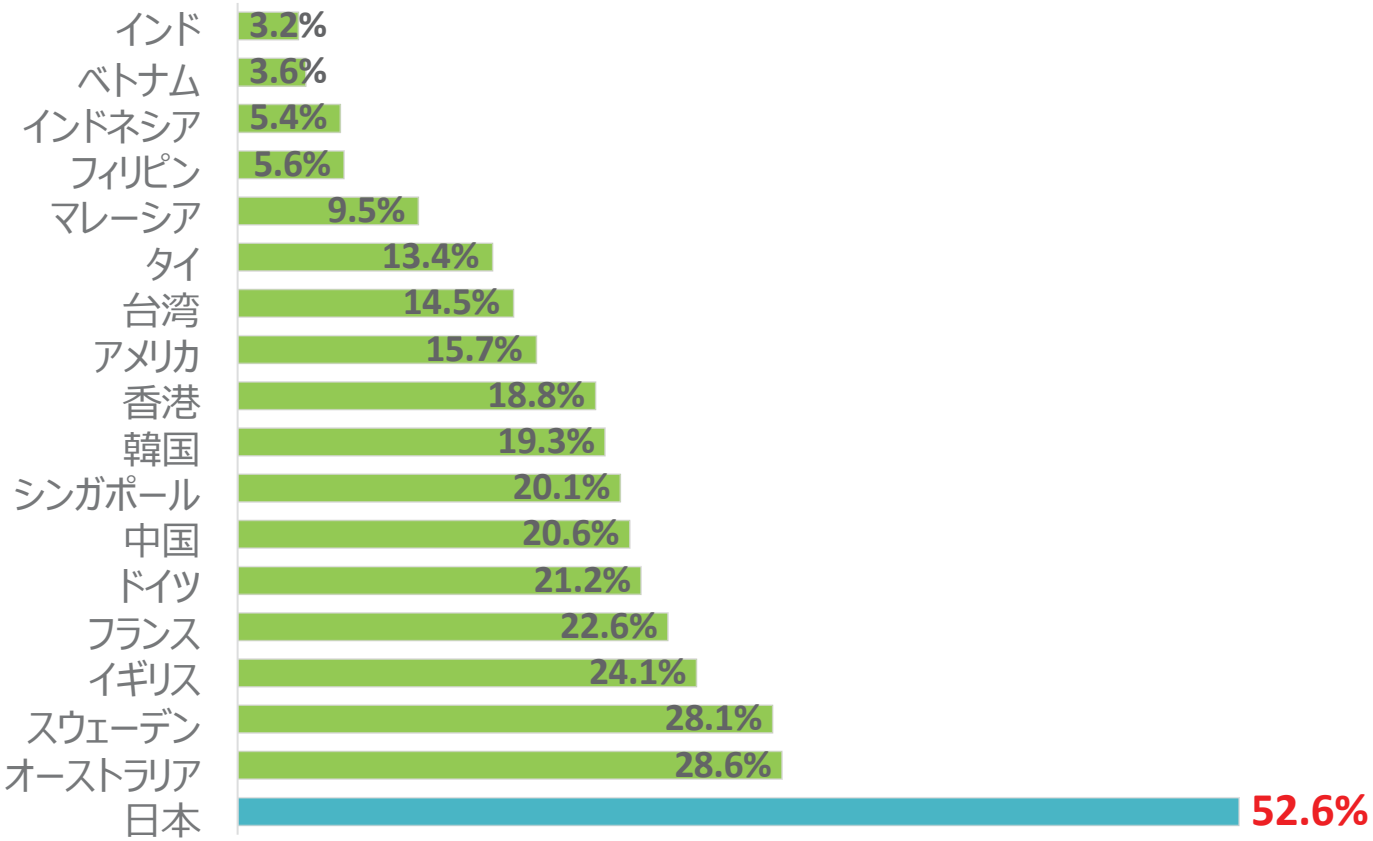
県トップ進学校 倍率(2025)

札幌南高校(北海道)	1.30倍
青森高校(青森県)	1.07倍
仙台第二高校(宮城県)	1.21倍
岡山朝日高校(岡山県)	0.98倍
高松高校(香川県)	1.10倍

出典）ベネッセコーポレーション調べ

【出所】小村俊平・ベネッセHD経営企画推進本部長ご発表資料（文部科学省勉強会2025/2/18）を基に、ベネッセコーポレーション提供の更新データを反映して作成。

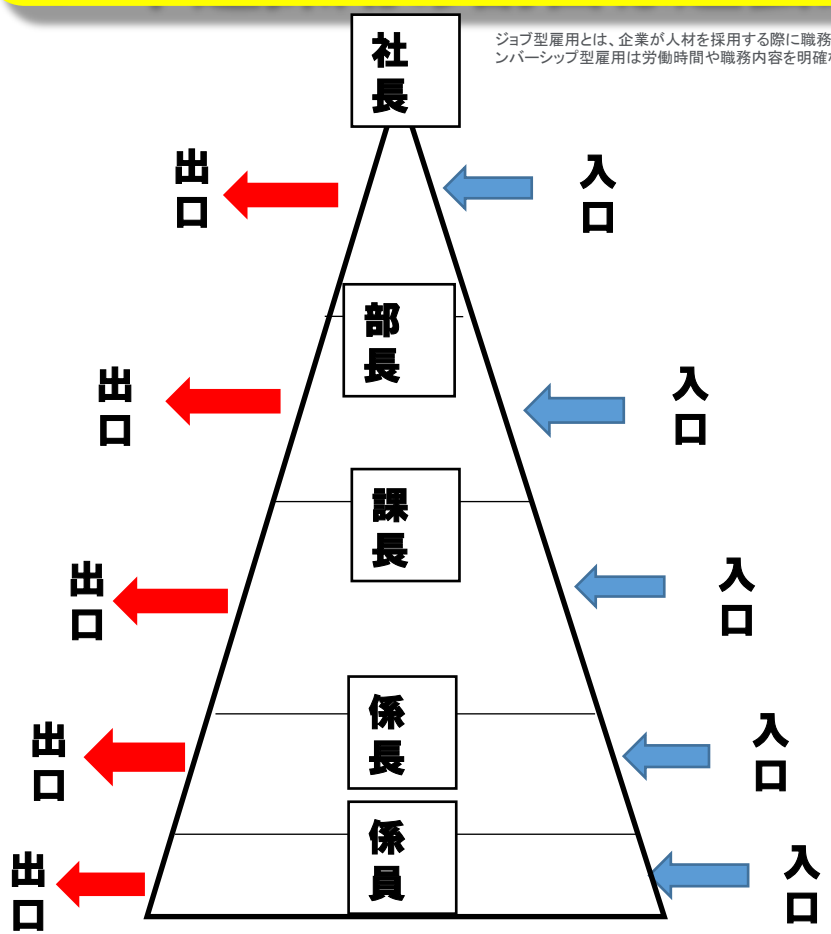
社会人になってから自己研鑽●自己啓発を行わない人の割合が高い



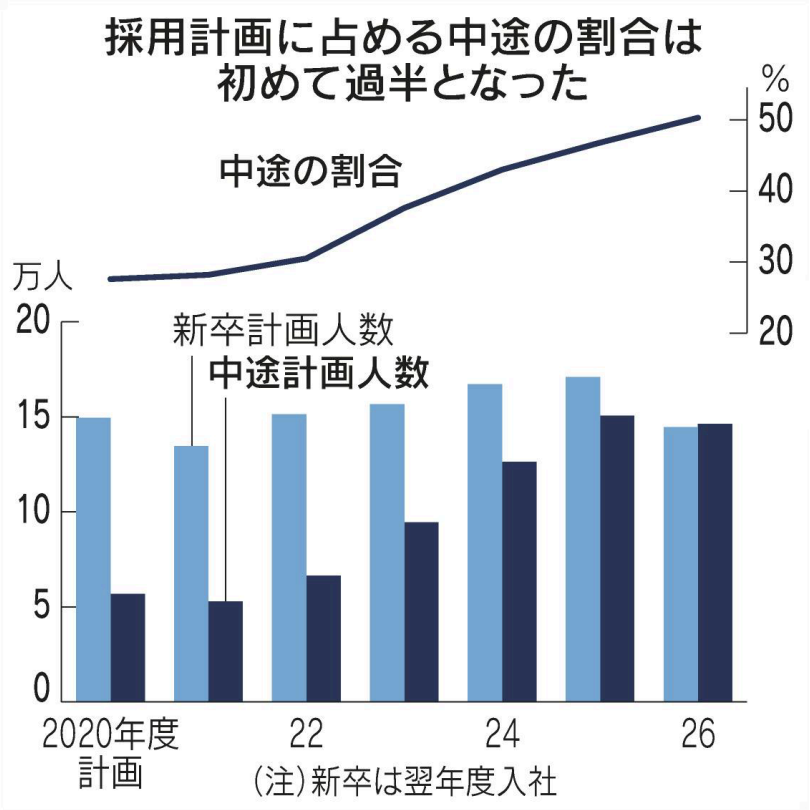
出展：パーソル総合研究所「グローバル就業実態・成長意識調査（2022年）」

- ジョブ型雇用が徐々に増加➡労働市場は流動化
- 中途採用の割合は過去最高（50.3%）

ジョブ型雇用とは、企業が人材を採用する際に職務内容を明確に定義して雇用契約を結び、労働時間ではなく職務や役割で評価する雇用システムのこと。日本型のメンバーシップ型雇用は労働時間や職務内容を明確な形では定義せず、「人に仕事をつける」仕組である一方、ジョブ型雇用は「仕事に人をつける」制度とも言われる。

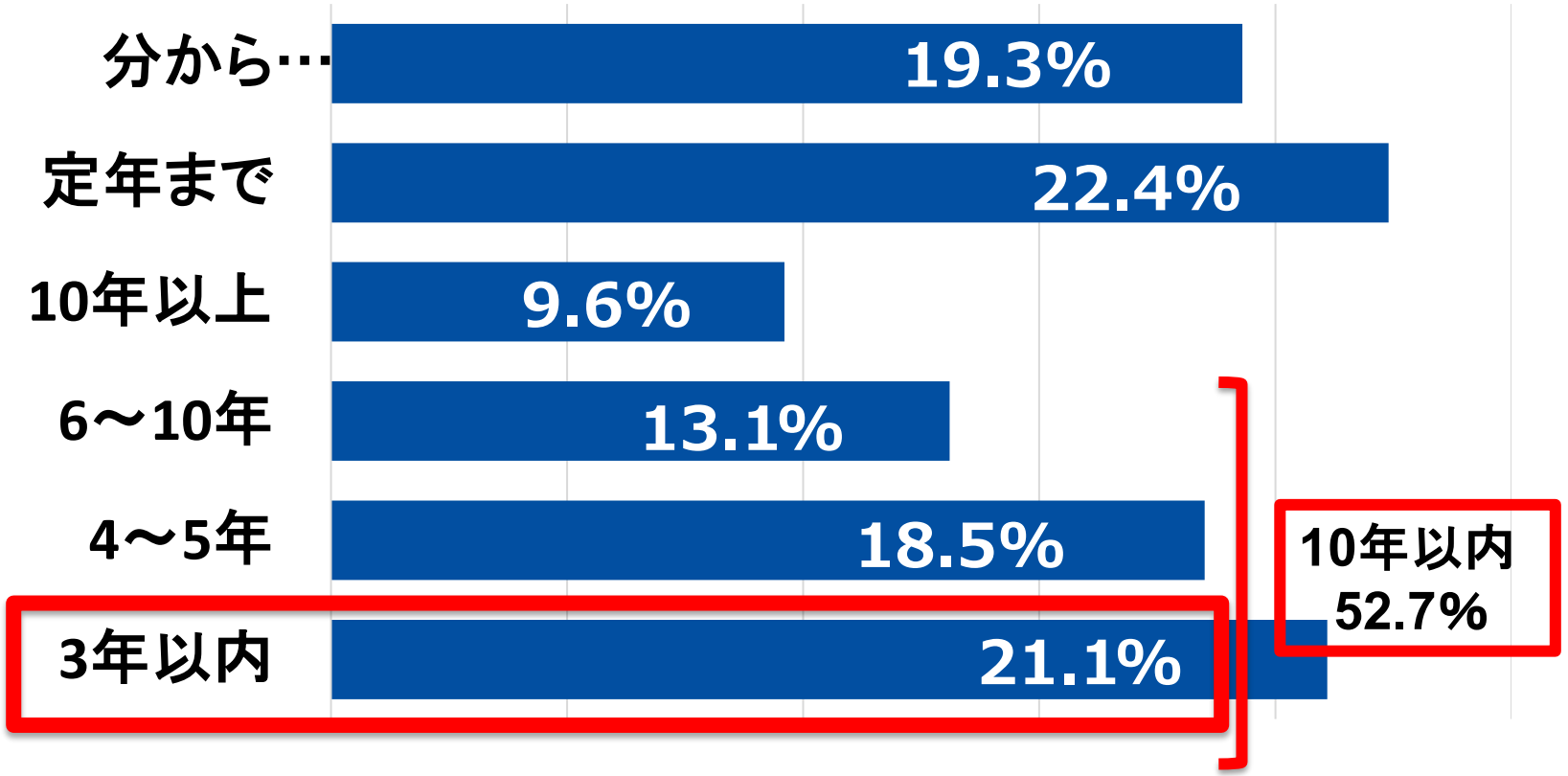


【出典】田中博秀『現代雇用論』日本労働協会、1980年、378頁・小熊英二『日本社会のしくみ　雇用・教育・福祉の歴史社会学』講談社現代新書、2019年、103頁より作成



【出典】日本経済新聞電子版「中途採用が初の5割超え、即戦力を重視　電機や通信でAI人材確保(2026年4月28日 18:00　有料会員限定記事)

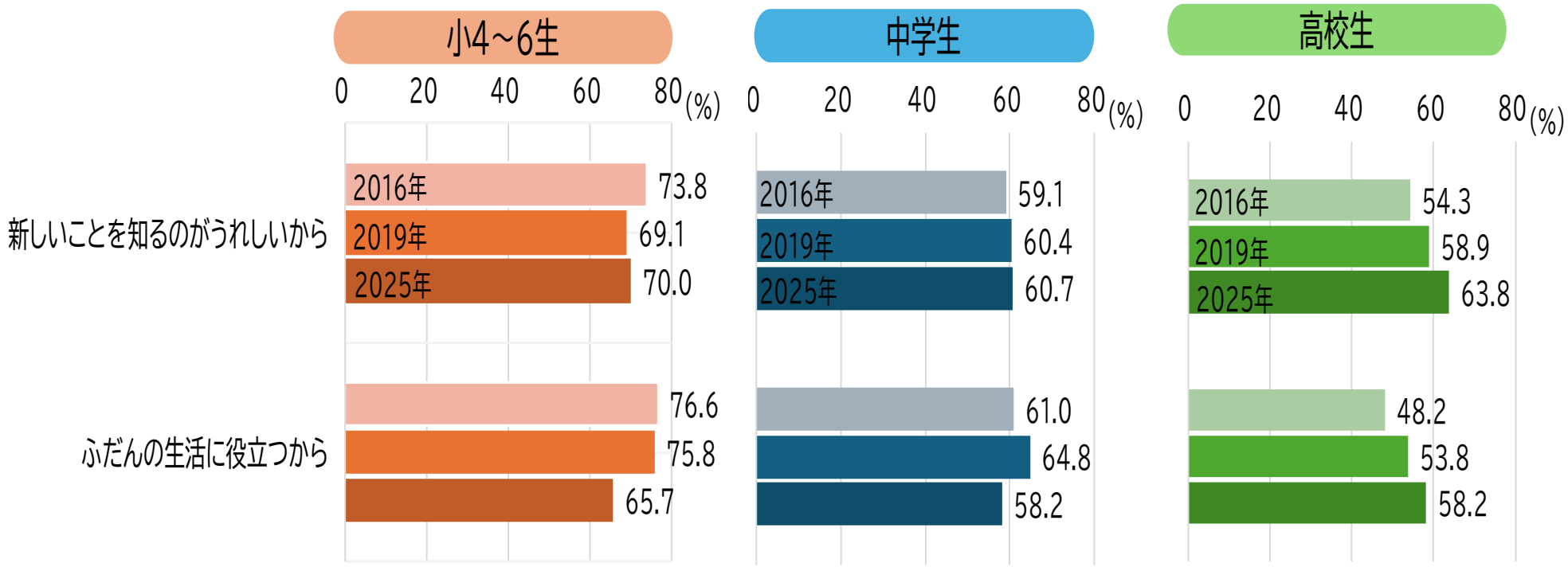
2025年新入社員＜今の会社で何年働く？＞



【出典】マイナビ転職　キャリアトレンド研究所「新入社員の意識調査（2025）」(mynavi.jp 2025/08/29)　https://www.mynavi.jp/news/2025/08/post_50066.html

子どもの生活と学び親子調査２０２５（東大社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所）より

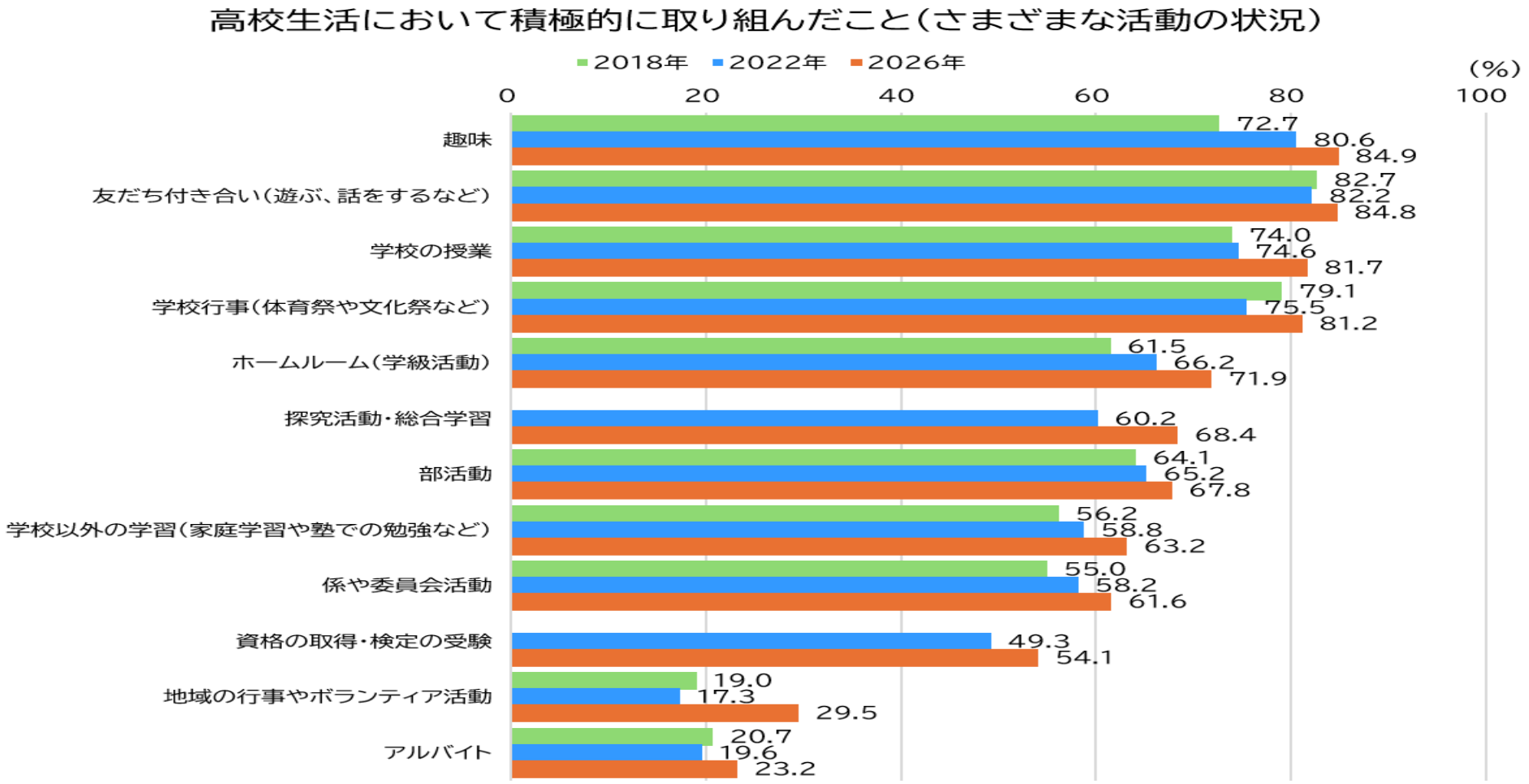
図1 勉強する理由(学習動機づけ)



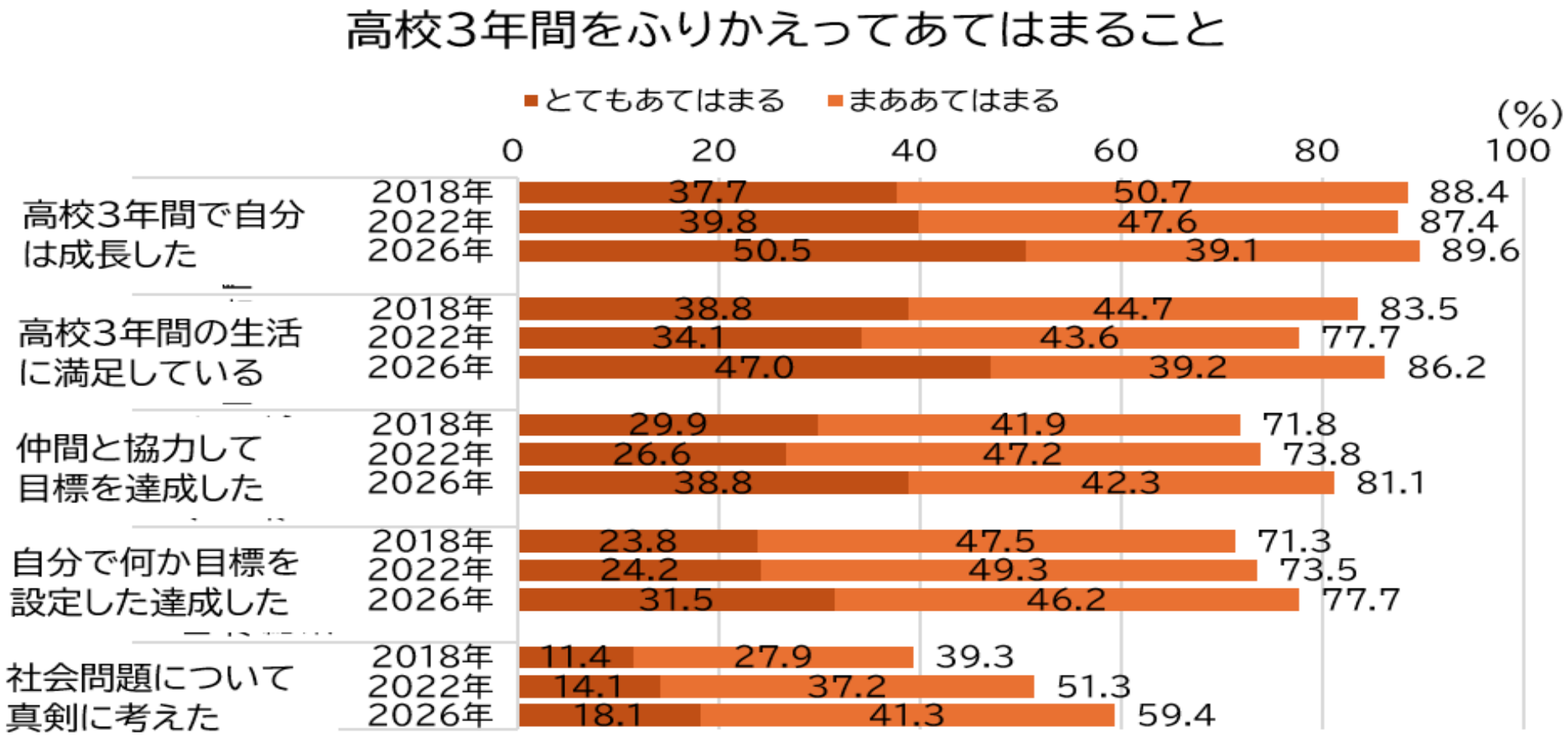
※「とてもあてはまる+まああてはまる」の合計(%)。

※2025年の小4~6生の数値が高い上位2項目を示している。

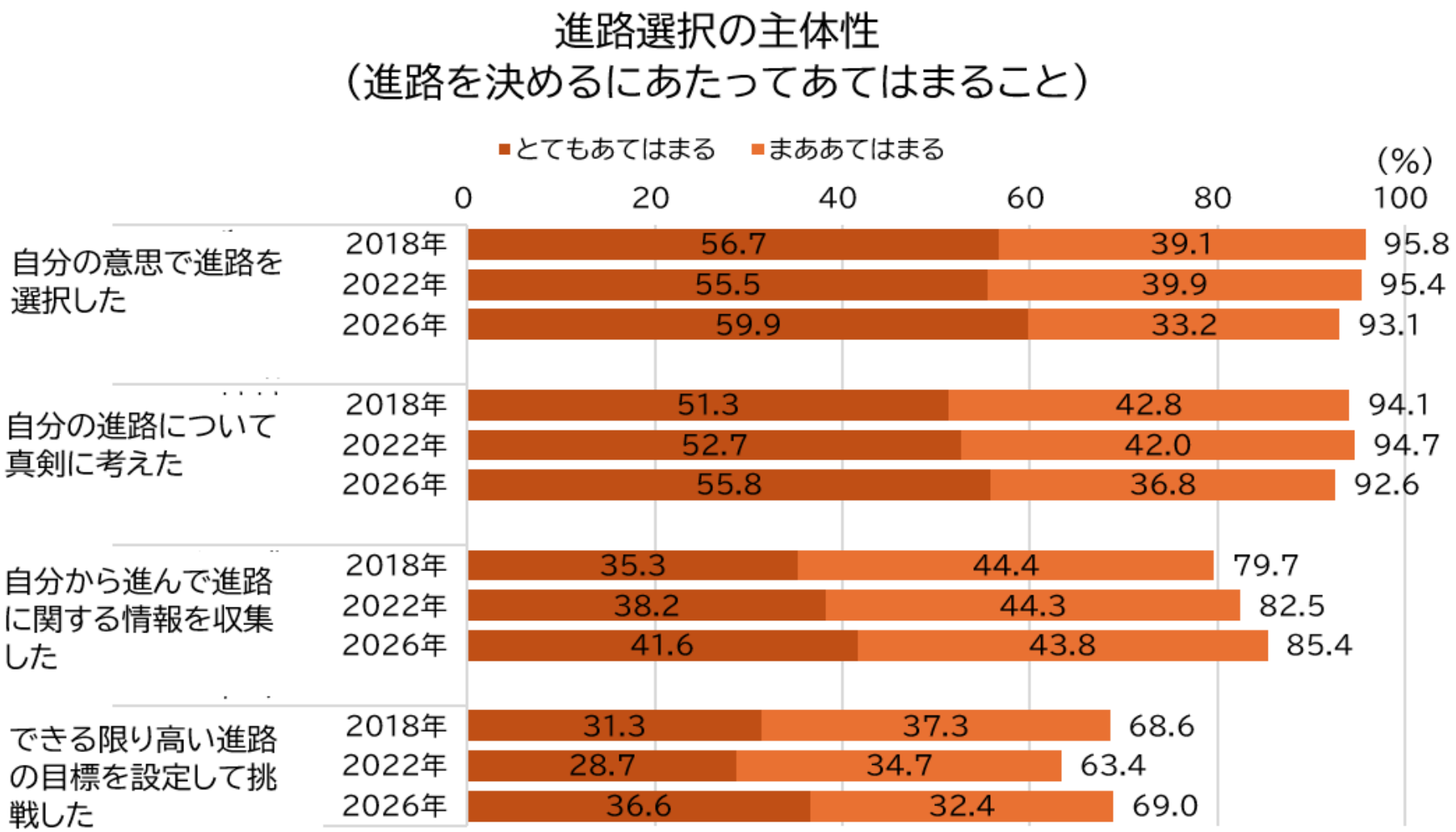
子どもの生活と学び親子調査２０２５（東大社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所）より



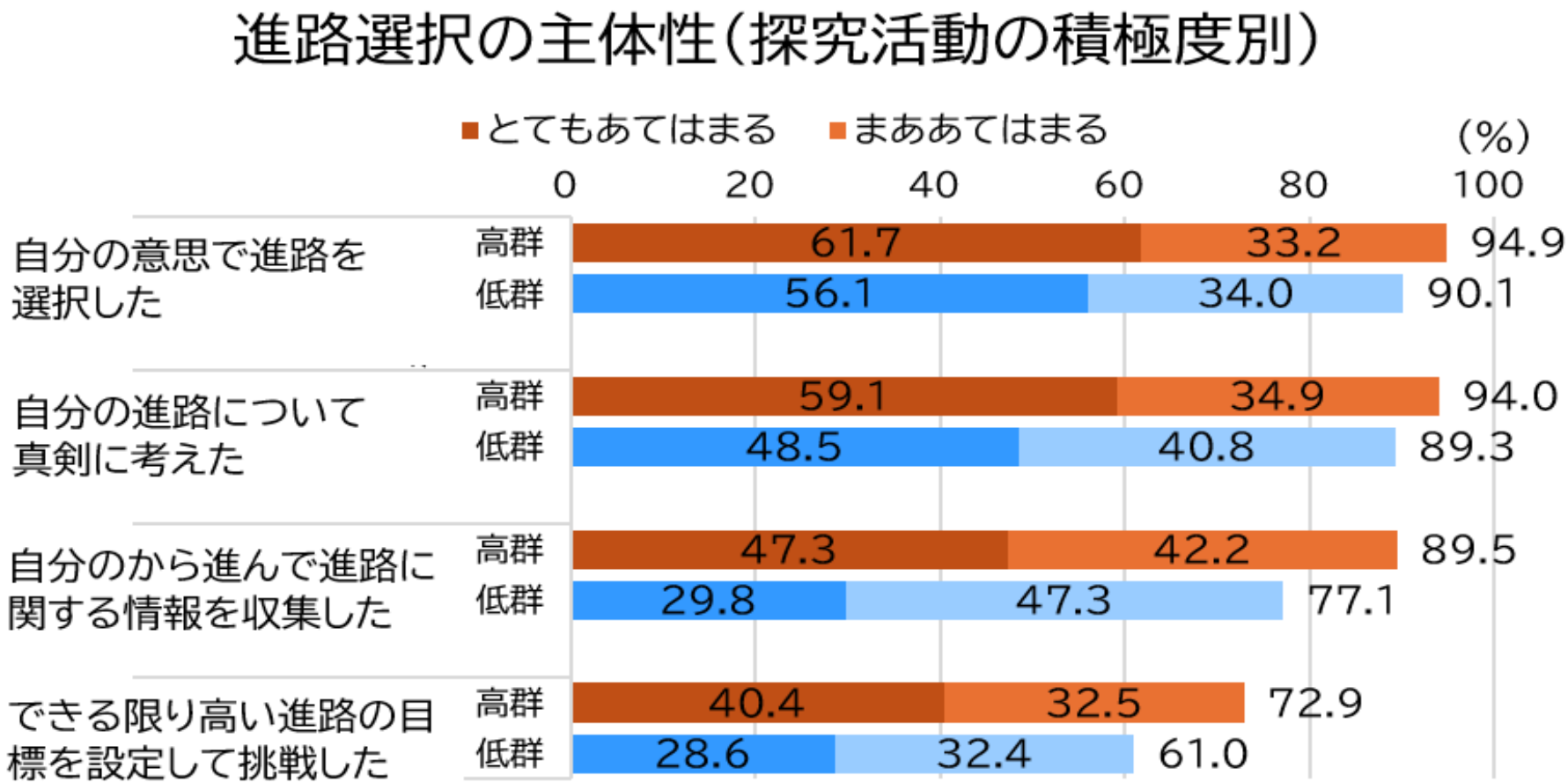
子どもの生活と学び親子調査２０２５（東大社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所）より



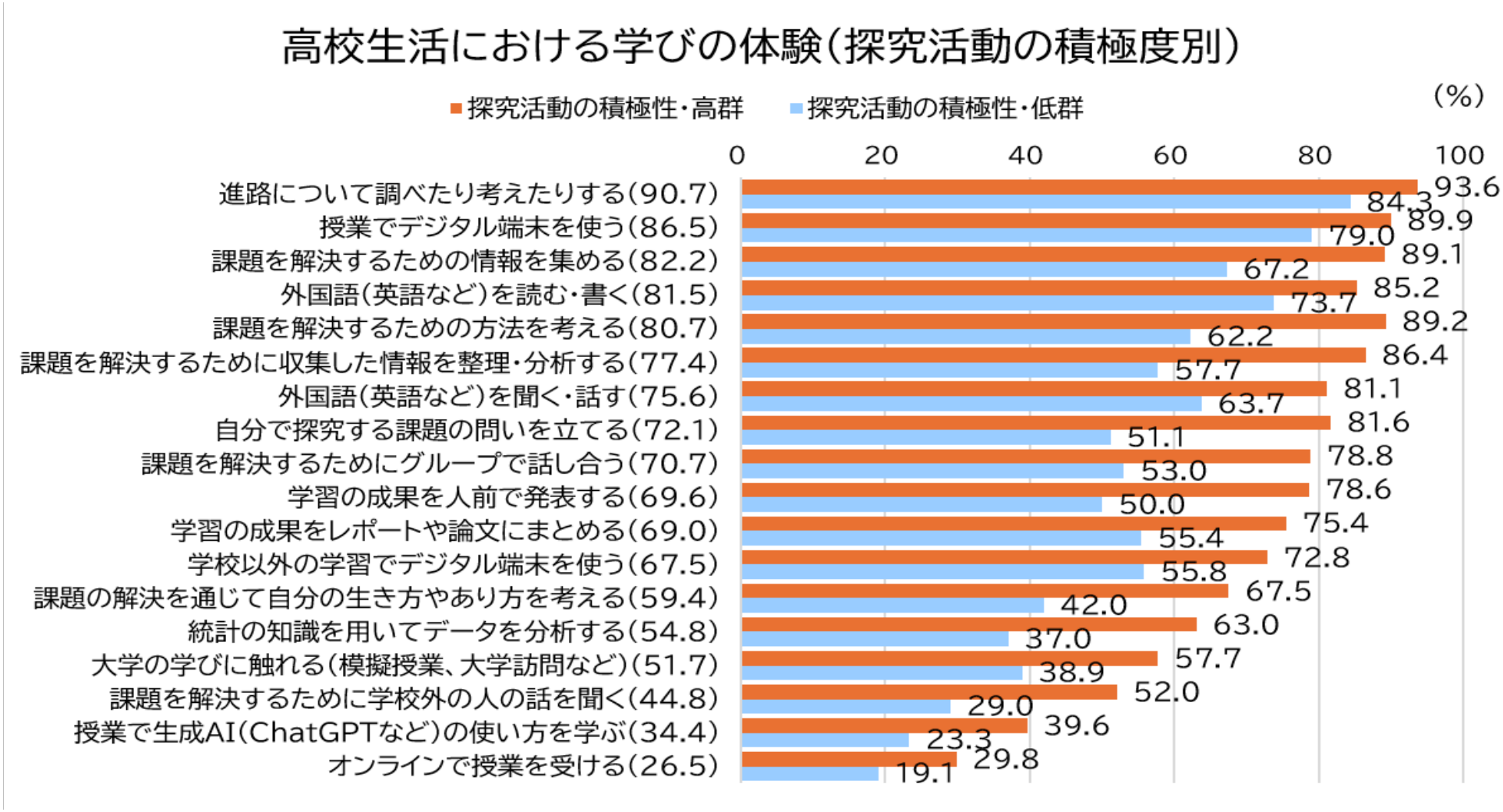
子どもの生活と学び親子調査２０２５（東大社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所）より



子どもの生活と学び親子調査２０２５（東大社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所）より



子どもの生活と学び親子調査２０２５（東大社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所）より



AI/DXの活用による公正な個別最適化と協働学習の充実

- 公正の意味
- 自由進度学習
- 多様な認知環境による学習：視覚（文字・動画）、聴覚、身体感覚
- 学習集団規模の最適化：1．2．4．8．16．32．64・・・
- 誰と学ぶかの最適化→一定の規模と多様性の確保
  - 生徒：同級生、異学年
  - 教員
  - 地域住民、学校ボランティア←コミュニティ・スクール
  - 実業専門人材
- 何を学ぶかの最適化
  - 現地現物での学び
- どこで学ぶかの最適化
  - 教室・校舎、オンライン、校外の現場
- いつ学ぶかの最適化
  - 授業内、放課後、帰宅後

これからのハイブリッドな学び（文責　鈴木寛）

- On-line（＋Intelligent Tutoring System）　BY　動画と生成AI
- Face to Face　1on1　Tutorial　　BY　教師
- Field Work(+PBL)，Performing　BY　実務家
  - 実地、実験、実技、実演、実習・・・

質問調査の結果

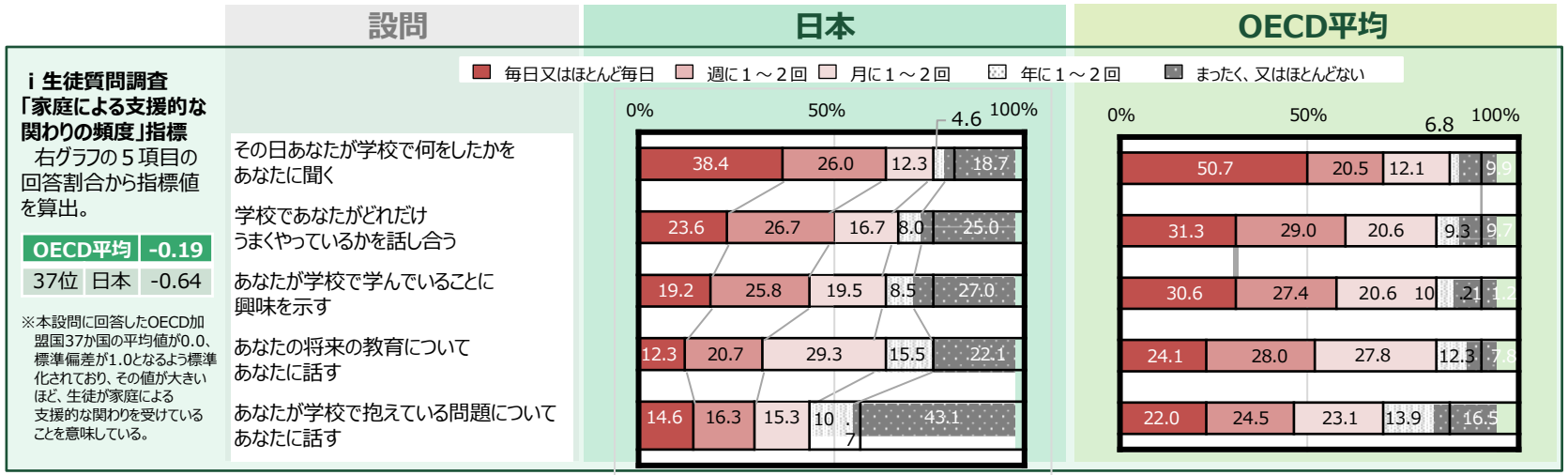
家庭による支援的な関わり、生活満足度

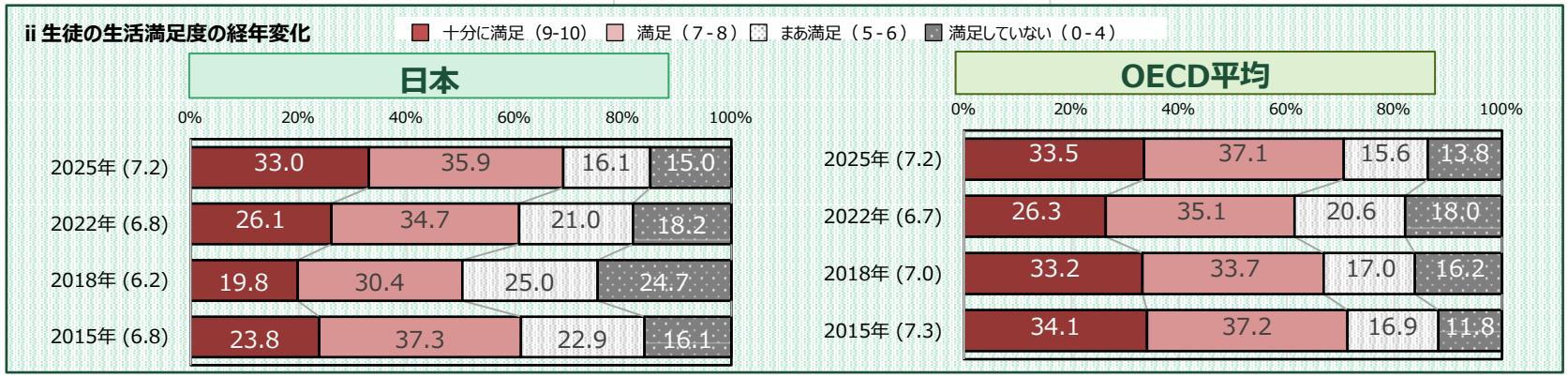
- 「家庭による支援的な関わりの頻度」指標について、日本はOECD平均よりも低い。
- 生徒の生活満足度は、「十分に満足」又は「満足」と回答した割合が、日本においては2018年に50.2%まで下がったものの、2025年には68.9%と2015年の61.1%よりも高い割合を示しており、OECD平均とおおむね同程度。

ｉ 生徒質問調査「家庭による支援的な関わりの頻度」指標
右グラフの５項目の回答割合から指標値を算出。

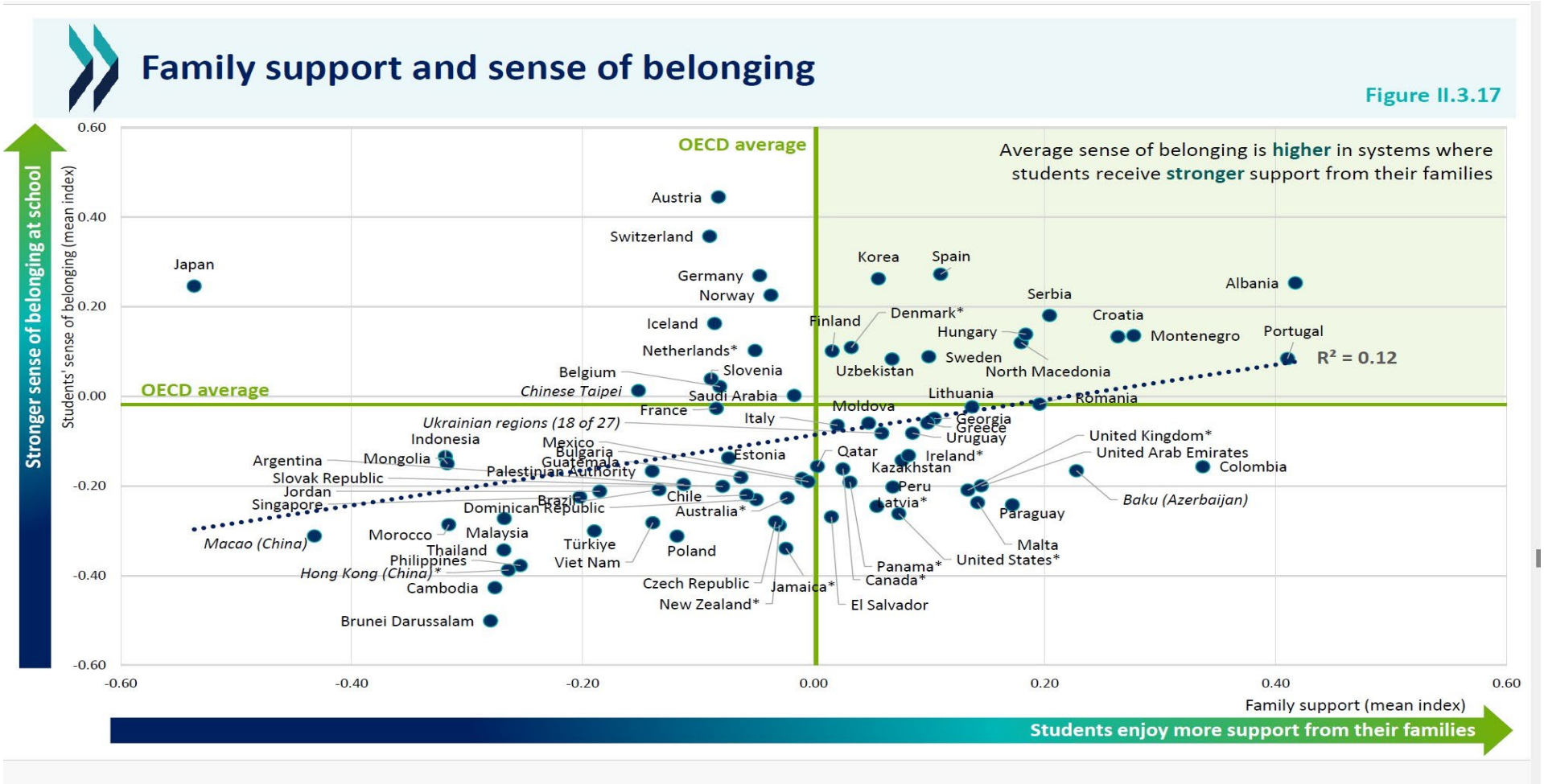
OECD平均	-0.19
37位 日本	-0.64

※本設問に回答したOECD加盟国37か国の平均値が0.0、標準偏差が1.0となるよう標準化されており、その値が大きいほど、生徒が家庭による支援的な関わりを受けていることを意味している。

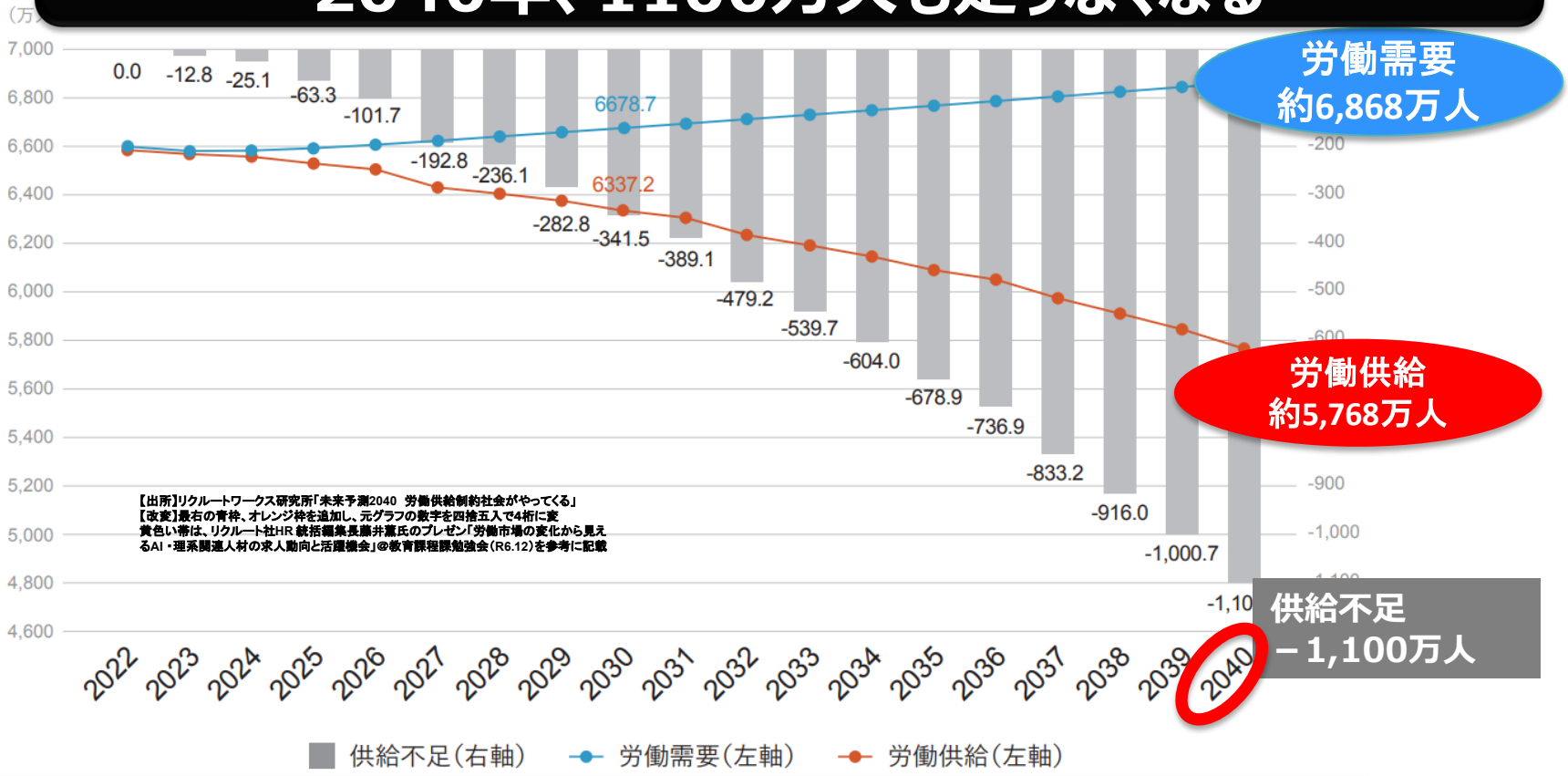




あなたは家族から支援してもらっているか？との質問に
日本の生徒からは最低評価

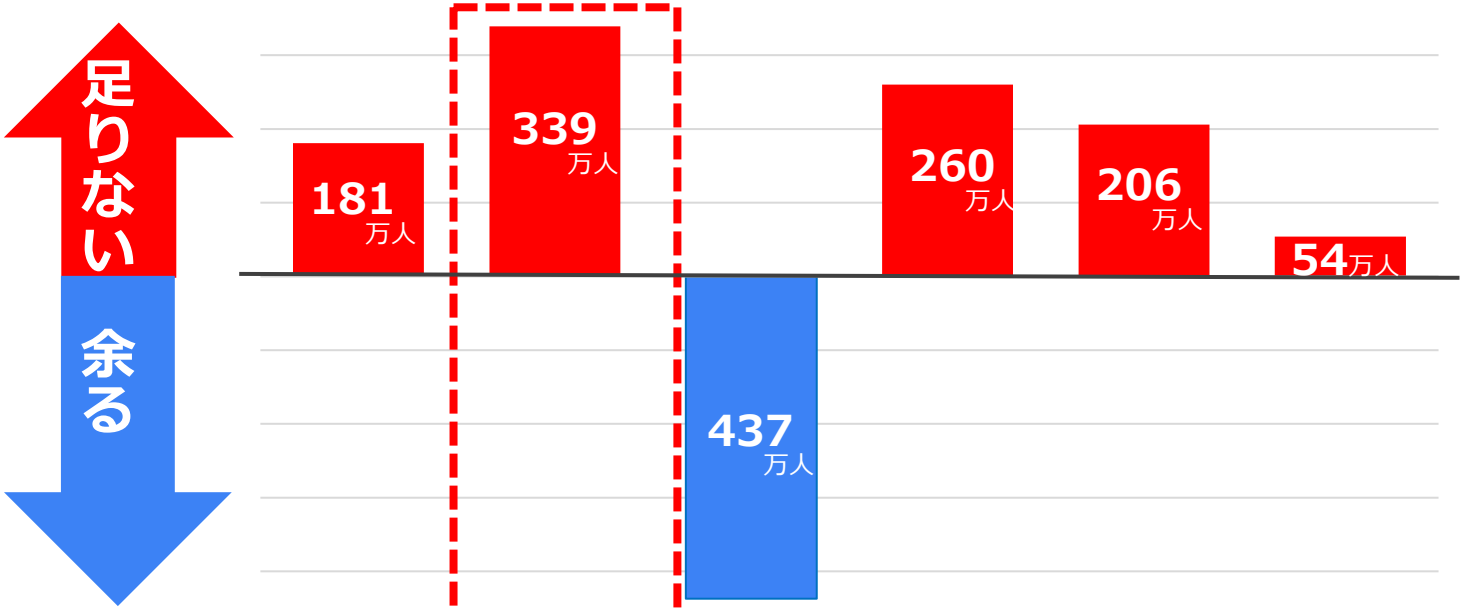


＜労働供給制約社会＞
2040年、1100万人も足りなくなる



2040年の人材需給予測（職種別）

- AI・ロボット等利活用人材、**約339万不足**
- 事務職は**約437万余剰**、一方で現場人材は**260万不足**

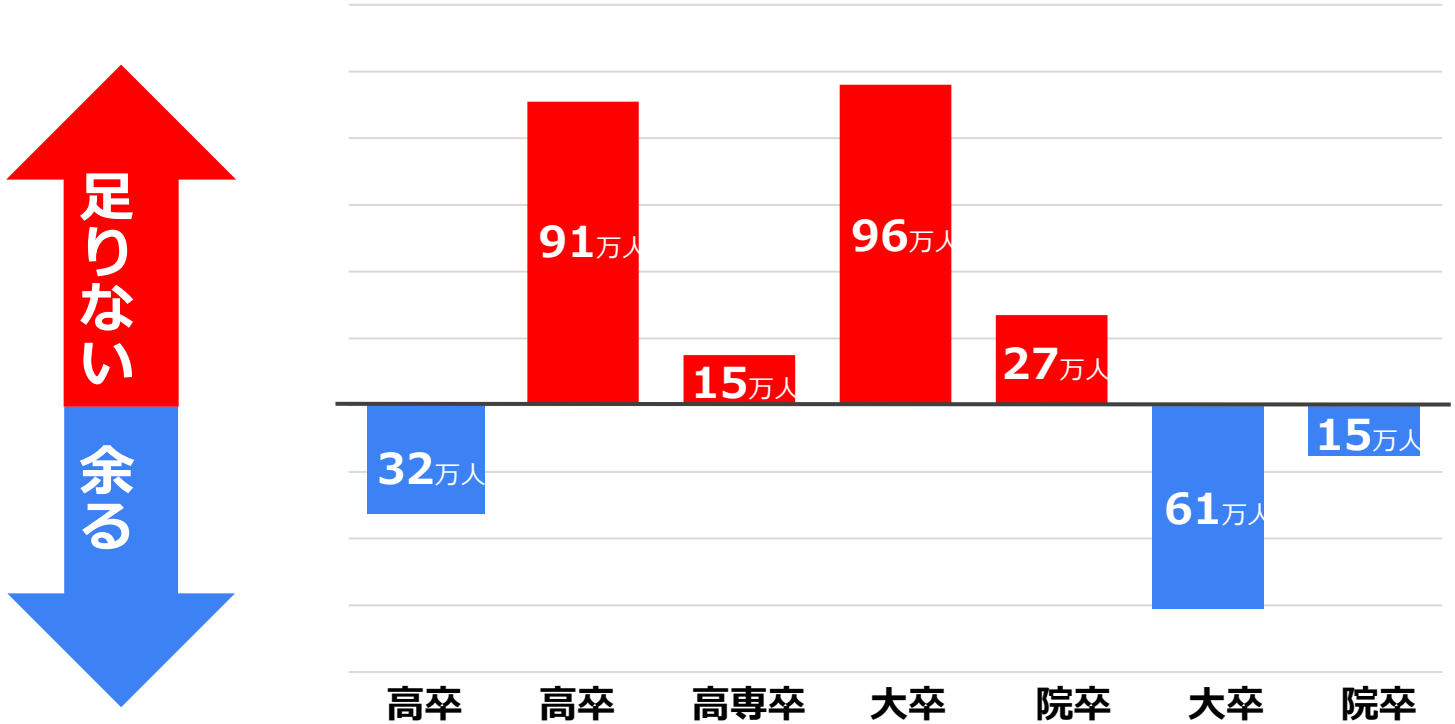


2040年需要数/供給数	1867万人/1686万人	782万人/443万人	1039万人/1476万人	3283万人/3023万人	731万人/525万人	2552万人/2498万人

※「2040年の就業構造推計（改訂版）について」（2026年3月5日産業構造審議会経済産業政策新機軸部会）を元に文部科学省で作成（2040年に十分な国内投資や産業構造転換が実現する場合の推計（新機軸ケース））、「新機軸ケース」とは、国内投資拡大と賃上げの好循環を前提に、高付加価値型産業への構造転換を通じて成長を目指す経済シナリオを言う。※2「現場人材」とは、生産工程従事者、建設・採掘従事者、サービス職業従事者等の職種を集計している。

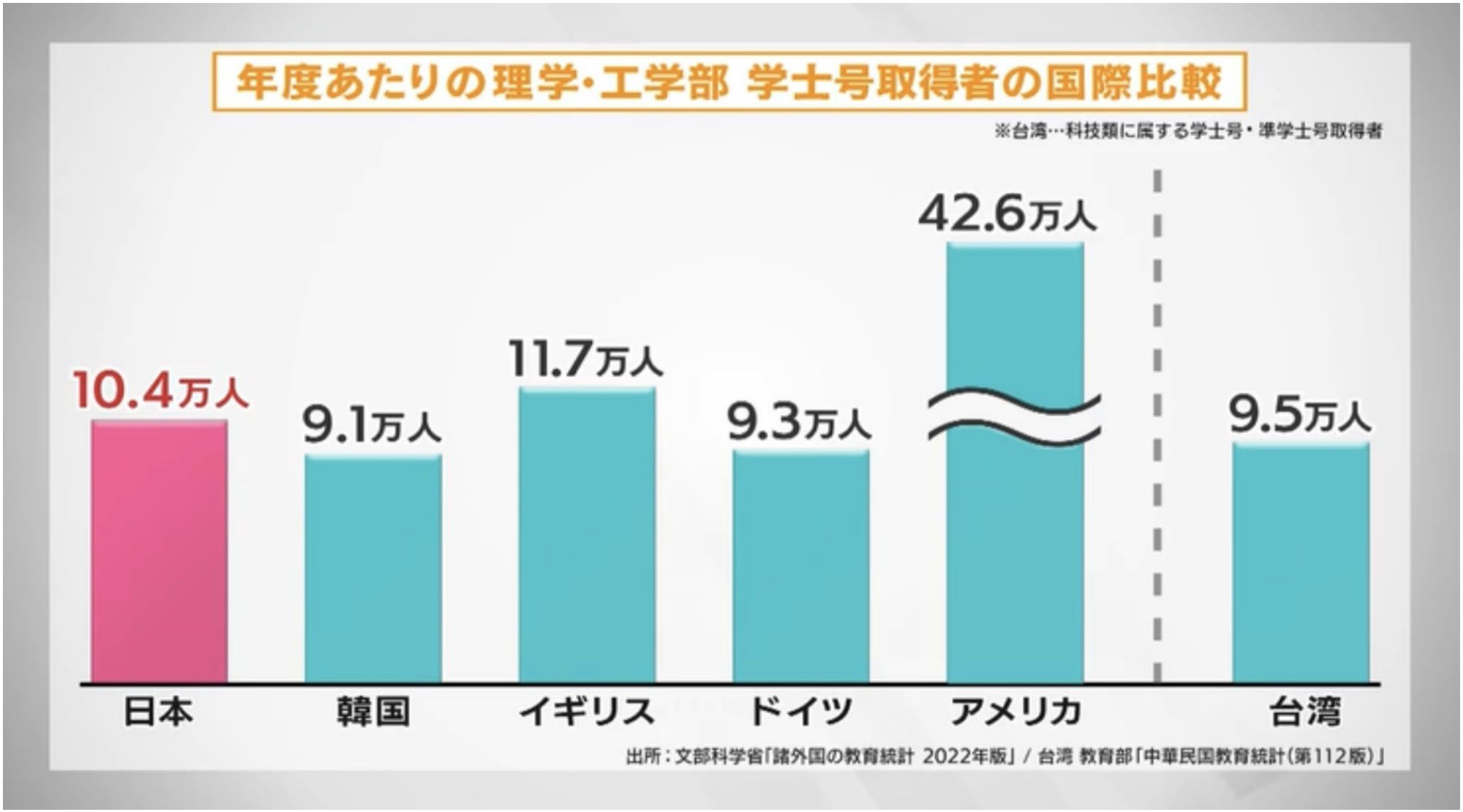
学歴別にみると…

- 大卒・院卒の文系人材は約80万余る
- 大卒・院卒の理系人材で約120万不足、工業高卒も91万不足

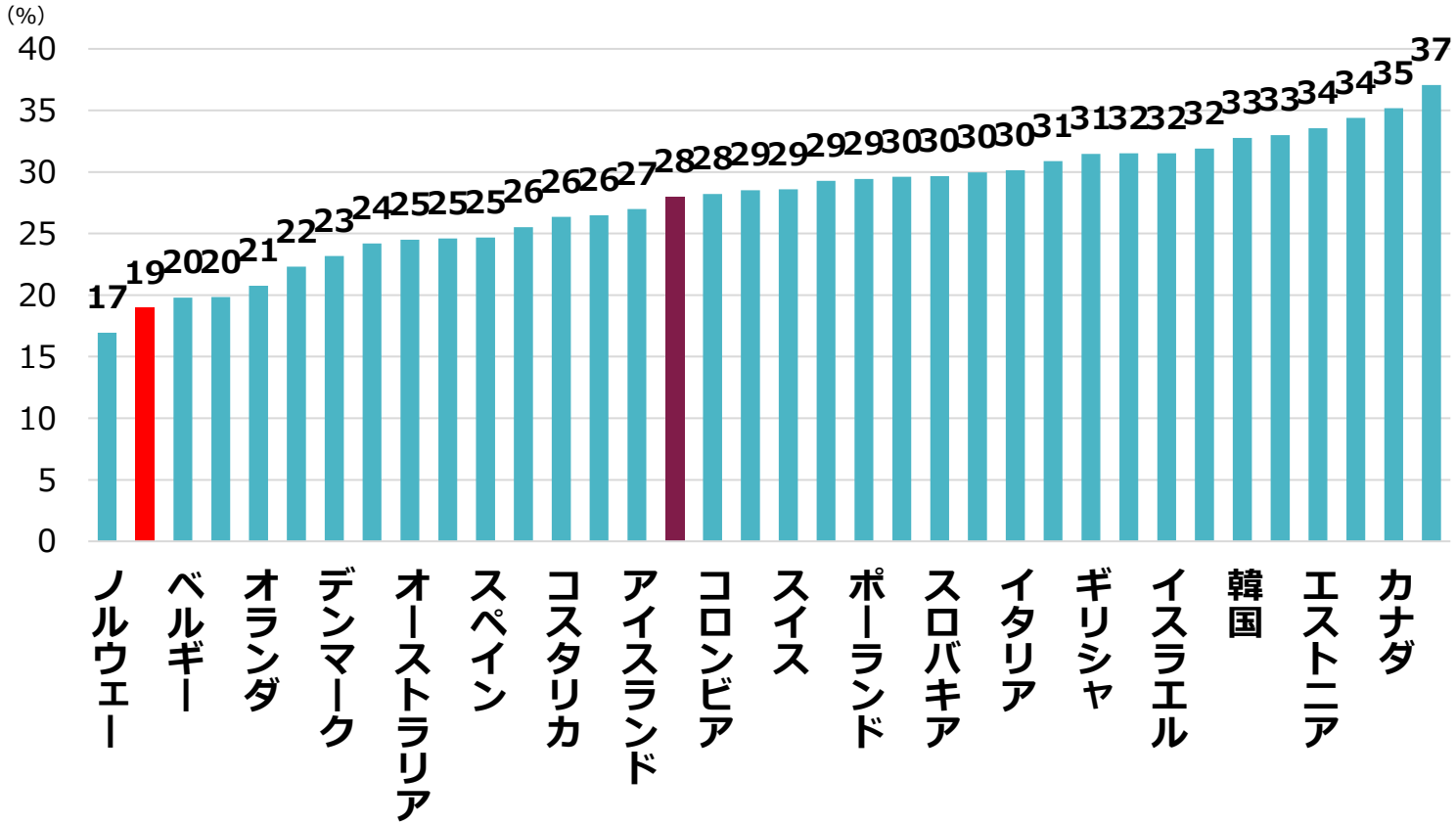


	高卒（普通科）	高卒（工業科）	高専卒	大卒理系	院卒理系	大卒文系	院卒文系
2040年需要数/供給数	778万人/810万人	538万人/448万人	77万人/62万人	638万人/586万人	217万人/189万人	1439万人/1500万人	110万人/125万人

※ 「2040年の就業構造推計（改訂版）について」（2026年3月5日 産業構造審議会経済産業政策新機軸部会）を元に文部科学省で作成（2040年に十分な国内投資や産業構造転換が実現する場合の推計（新機軸ケース））
「新機軸ケース」とは、国内投資拡大と賃上げの好循環を前提に、高付加価値型産業への構造転換を通じて成長を目指す経済シナリオを言う。※2 「現場人材」とは、生産工程従事者、建設・採掘従事者、サービス職業従事者等の職種を集計している。

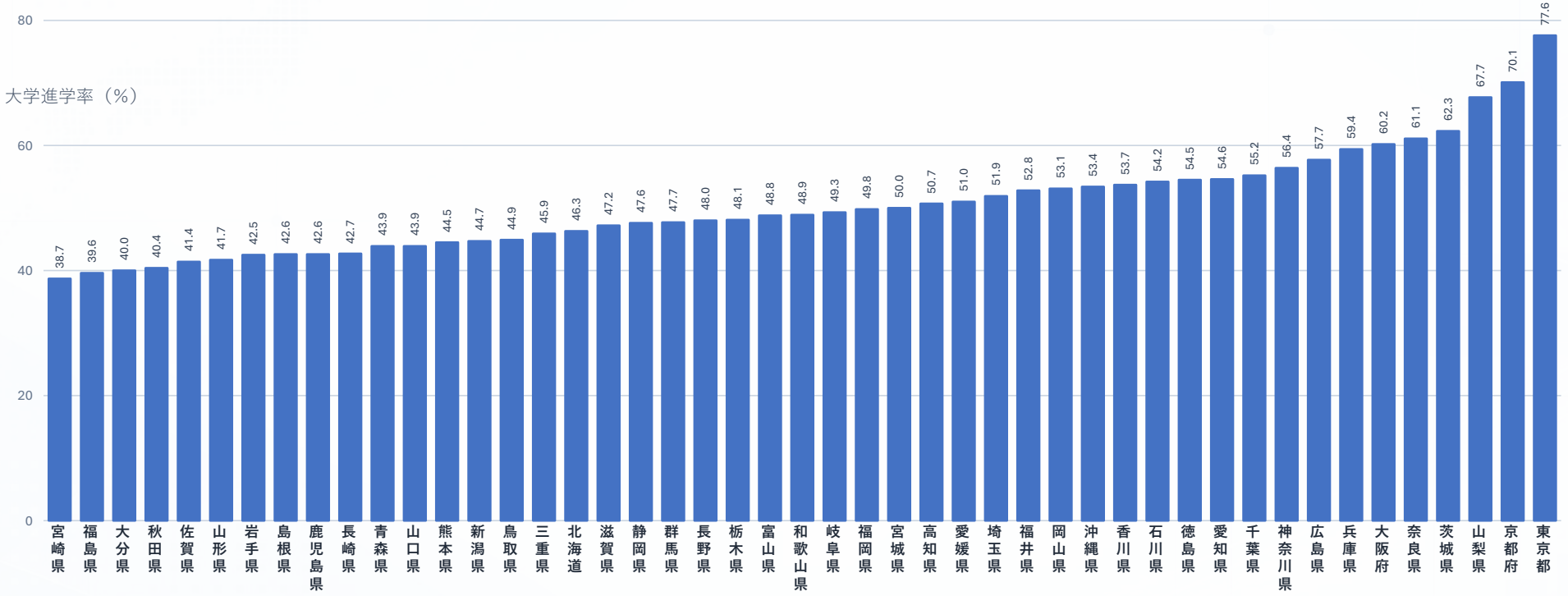

年度あたりの理学・工学部 学士号取得者の国際比較
※台湾…科技類に属する学士号・準学士号取得者
10.4万人
9.1万人
11.7万人
9.3万人
42.6万人
9.5万人
日本
韓国
イギリス
ドイツ
アメリカ
台湾
出所：文部科学省「諸外国の教育統計 2022年版」/ 台湾 教育部「中華民国教育統計（第112版）」

理工系学部入学者は全体の19%
（OECD諸国ワースト２位、女子は８％でOECD最下位）



（備考） “Natural sciences, mathematics and statistics” , “” Information and Communication Technologies , “Engineering, manufacturing and construction”を「理工系」に分類される学部系統としてカウント。
データは2023年時点。（出所） OECD.stat「New entrants by field」より作成。

2024年度 女性の大学進学率



出典：内閣府男女共同参画局「男女共同参画白書 令和7年版」特－10図（原典：文部科学省「学校基本調査」）

七・五・三（文責　鈴木寛）

普通科高校における理数科目履修率向上（文系であっても数理情を）
大学理系・文理融合学部の増員、
高専の創設・増設、
大学・高専への工業高校からの編入学枠の増

七年教育→実業界
　　大学の理系・文理融合の定員の拡充
　　高校3年＋大学4年
　　高専5年＋大学3年次に編入

五年教育→実業界
　　高専5年
　　専門高校3年＋高専編入２年
　　専門高校3年＋専門学校2年
　　専門高校3年＋専門職短期大学2年
　　専門高校３年＋専門高校専攻科２年

三年教育→実業界
　　専門高校3年